



○○と●●の両立 部活と勉強～適応と変化



長堀紀子

北海道大学人材育成本部女性研究者支援室
[001-0812] 札幌市北区北12条西7丁目
特任准教授, 博士(理学).
専門は人材育成, キャリア開発, 女性研究者支援.
nnagahori@synfoster.hokudai.ac.jp
freshu.ist.hokudai.ac.jp/

両立していますか？

大人になってすっかり忘れていたが、中学・高校のころ、部活と勉強の両立は私を含め周囲の仲間のテーマだった。大学生になってからはサークル活動と勉学の両立。研究を始めてからは、実験と論文執筆の両立が大変だった。手を動かすことに時間を使い過ぎていたと思う。そして出産というライフイベントに初めて直面し、妊娠中は自分の体調管理、産後は育児と仕事へのリソース配分のバランスを、常に考えていた。そのうちに、2人目、3人目を授かり、家事と育児の両立や3人の子どもそれぞれの母親としての両立課題に直面した。3人とも自分だけのお母さんを求めるのだ。その結果「育児は母、家事は父」が家庭内役割分担の定番になった。綱渡りの生活の中、ぎっくり腰とデスクワークの両立も辛かった。

上記の私の例はさておき、多くの大学研究者は、研究と教育と大学組織運営、さらには社会活動の両立のために日夜努力している。ミッションの異なる複数の組織の長の両立、本業とベンチャー等副業との両立、研究室運営と大学運営の両立、プロジェクトAとBの両立、研究と社会活動との両立など、相当に高度だ。どこにどの程度の重きを置くかは、当然ながら人それぞれキャリアステージやタイミングによるだろう。研究者に限らず多くの人は複数の役割をもっていて、自分の時間と気持ちをどう振り分けるか、常に考え複数の役割を「両立」している。○○と●●の両立と聞くと、つい「仕事」と「家庭」と思いうかべがちだが、本当はどちらも個人が担っている役割の中の一つに過ぎないし、仕事あるいは家庭それぞれの中にも、多くの両立課題がある。

両立は後ろめたい？

育児期のおもに女性が「仕事も育児も中途半端」「仕事を思いきりできないことに後ろめたさを感じる」ことはよく聞く。私自身、後ろめたい気持ちには身に覚えがある。でも、もしかしたら、大学運営関連の業務が多すぎて研究室の学生とのコミュニケーションが少なかったり、その分若手教員にしわ寄せがいたり、逆に研究関連の業務で忙しく学内の委員会等にあまり出席できない状況になったとき、(女性に限らず)

研究者は、中途半端感を抱いたり「○○に100%コミットできずに申しわけない」気持ちをもっているかもしれない。本人や家族の病気や事故、治療や介護が必要なこともまた誰にでも起こり得る。両立の問題には女性だけが直面しているわけではない。

後ろめたいと思わざるを得ないのは、社会で共有されている「仕事は常に(家庭などの)私事に優先されるべき」「役割には100%の全力で取り組むべき」という価値観に反するからであろう。

仕事とは何か？ 有償労働と無償労働の両立

「仕事は私事に(常に)優先されるべき」というときの「仕事」とは、個人が労働と引き換えに給料をいただく有償労働を指すことが多い。しかし、有償労働だけでは社会は成り立たない。育児、家事、介護、市民活動、ボランティアへの参加など、多くの無償労働が有償労働とともに社会を支えている。現状では、人々が思い浮かべる「仕事」のイメージは「有償労働」中心になっていると思われるが、社会を支える無償労働に、より注意と敬意が払われて欲しいと思う。おもに無償労働によって担われる育児が生み出すのは、未来の18歳人口であり、納税者であり、市場だとも言える。乗り合わせた電車の中で泣き叫んでいる赤ちゃんは、何十年後に私の命を救ってくれる医師かもしれない。有償労働と無償労働の両立もまた、社会全体の課題でもある。

適応と変化の両立

最後に、現在の私の両立課題について述べたい。所属部署では「すべての研究者が能力を発揮できる研究環境を構築する」「女性研究者の活躍を促進する」の二つをミッションとしている。社会には、無償労働に関与せずに済むライフスタイルの男性に合わせて作られた制度や「○○べき」という価値観が根強く残っており、それ以外の人に不利に作用している。少しずつ改善されているものの、さらなる変革に寄与する取組や支援を企画し実行することが、われわれの役割である。同時に、変化の途中においても女性研究者が環境に適応し活躍できるよう取組と支援を進める。個人の仕事においても、今ある環境で力を発揮できるよう適応しつつ、目的に向かって変化を忘れず恐れずにいたい。「適応」と「変化」の両立が今の私のテーマである。